

## 岡崎城南ロータリークラブ卓話

皆さんこんにちは地区米山記念奨学委員会の伊藤と申します。  
本日はどうぞよろしくお願ひいたします。  
日頃は米山記念奨学事業に対しまして、大変暖かいご理解とご支援ご協力を頂き厚く御礼申し上げます。現在までに123の国と地域から18642人の米山記念奨学生を支援しています。

岡崎城南ロータリークラブ様におかれましては、今までにお世話頂いた奨学生は7名、寄付金累計でも約23,457,392円の多額のご寄付を頂き、まことに有難うございます。

●さて、米山記念奨学会の誕生から少し触れたいと思います、  
1952年12月に日本で最初のロータリークラブを創立した米山梅吉氏の功績を記念して、東京ロータリークラブが米山奨学制度を設立し、翌年米山基金として募集を開始、

●さらに翌年1954年9月初めてタイの留学生ソムチャード君を奨学生として受け入れたのが始まりであり、1957年9月に日本国内全クラブの合同事業としてロータリー米山記念奨学委員会が結成され全国組織となりました。その後月にタバコ一箱を節約してを合言葉に寄付金を募る運動がスタートしたと言うことであります。

1959年に世話クラブ制度を設置、1971年からカウンセラー制度も導入し奨学生の個人的ケアにあたっています。1967年7月には文部省からの許可を得て、財団法人ロータリー米山記念奨学会が設立され現在に至っています。

現在日本全国のロータリアンからの支援を浄財として外国人留学生に奨学金を支給する民間最大の奨学財団になってまいりました。

●古沢氏は最初に迎えた奨学生を見届けることなく、1955年に亡くなりました。その3年後、第1号奨学生のソムチャードさんがいよいよ母国へ帰る日、東京RCの新田義実氏（にった・よしみ、のちに米山奨学会副理事長）がバンコクRCへ宛てた手紙の一文をご紹介します。

「いよいよソムチャードさんが日本での勉学を終え、帰国します。彼は4年間、日本で多くのことを学びました。楽しいことばかりではなかったと思いますが、人間は基本的に同じであるとわかってくれたはずです。これは、ロータリーにおけるわれわれの信念であり、人は世界の人々と友情を育むことができるのだと、われわれは証明したいのです。今からソムチャードさんはあなた方の元へ帰ります。あなた方は彼を誇りに思ってくださいることでしょう――」

●ロータリー米山奨学制度は他の奨学制度と大きく違う点があります。それは世話クラブ、カウンセラー制度と言う独自の制度であります。奨学生一人に地域のロータリークラブが世話クラブとなり、ロータリーとの交流の起点になっています。さらに世話クラブ会員の中からカウンセラーが選ばれ奨学生の経済的支援だけでなく、ロータリーの豊かな人的資源を活かし、精神面でも支えながら、母国を離れて心豊かな生活が送れる様、心のケアに配慮され、より深く日本を知り、ロータリーが求める平和の心を学び、将来世界を繋ぐ懸け橋となる人材育成であります。

### ●なぜ、外国人留学生を支援するのか？

戦後 世界の平和を願って今後日本の生きる道は平和、それをアジアに、そして世界に理解してもらう為には、多くの留学生を迎え入れ、平和を求める日本人と出会い、信頼関係を築くこと。それが日本のロータリーに最もふさわしい国際奉仕事業であり、私たち日本のロータリアンにとって大いに胸を張って誇れる国際親善と世界平和の事業であると思います。事業創立から60年以上の歳月がながれましたが、民間外交として世界に平和の種子を蒔くという米山奨学事業の使命は一貫して変わっていません。

むしろ、今日の世界情勢と日本の置かれている状況を考えるとき、その使命は益々重要性を増しているのではないのでしょうか。

米山奨学事業の価値はどんな奨学生を採用したか、どんな奨学生に育てたか、どんな奨学生に育ってくれたかであるように、世界各国からの留学生を支援し 将来世界を、日本を繋ぐ懸け橋となる人材育成事業が最大の目的です

しかし、残念な事に 近年ロータリアンの数も10万人から8万8千人にまで減少しました、これに伴ない皆様からの愛の浄財も減少しています。昨年までは年間約800人の奨学生を全国で支援していましたが、今年度からは約700人に減りました残念なことだと思います。

### ●寄付はきちんと使われているのか？

皆さんが米山に寄付したお金は、全額奨学事業に使われます。

グラフを見てください

豆辞典7ページをご覧ください(7~9)

### ●寄付金の税制優遇

豆辞典11ページをご覧ください

豆辞典13ページ

2760地区の平均寄付額は20,812円で日本の中で9位で、全国平均を上回っていますが次のグラフを見てください。会員数は日本で1位なのに黄色の寄付をしてくださった方は28.9%約3割です。全国平均は4

1. 2%で全国1位の2650地区は8割のロータリアンの方が寄付をなさっています。寄付をしていただける方が増えると奨学生の数が増えます。2760地区は今年度37名で来年は40名です。ちなみに2650地区は会員数は当地区の6割くらいです。奨学生数は今年度40名、来年度43名に増えています。

●元奨学生、学友はどうしているのか

現在日本に学友会が31、海外に台湾、韓国、中国、タイ、ネパール、モンゴルの6か所

現在ベトナムにも学友会の予定です。

●そのうちの1人をご紹介します。

モンゴル出身の米山学友、ジャンチブ・ガルバドラッハさんは、今から12年前、モンゴルで初めての3年制高校を設立しました。日本の制服や部活動、給食制度などをとり入れた、日本式高校です。現在は小学校と中学校も併設し、世界各国へ留学生を送り出すような、非常に優秀な人材を育てています。

また、ジャンチブさんは東日本大震災のとき、多くの外国人が日本から逃げていくなか、200kgもの支援物資と義援金を持って、日本へ来てくれました。現在は国際ロータリー第3450地区のフレールRC会員で、我々と同じロータリアンです。

●中国の姫軍（キグン）さんは、多くの日本企業を顧客にもつ弁護士で、ヤマハ発動機を原告とする商標権侵害訴訟では、過去最高額での全面勝訴を勝ち取りました。

日中関係が悪化した際は、中国にいる日本企業や駐在員の安全のため、24時間ホットラインを設けて無料相談を受けたそうです。

彼はまた、2007年から毎年50万円もの寄付金を米山奨学会へ送りつけてくれており、中国学友会を正式に発足させた初代会長でもあります。

ここで、一つのエピソードをご紹介します。

2010年の夏、中部名古屋みらいRCが中国学友会（北京分会）を訪ねて、一緒に養護施設の子供たちを訪問しました。この日は9月18日。満州事変が起きたこの日は、中国全体で、日本への反感が最も高まる日です。

しかし、中国学友会も、養護施設の子供達も、職員も、ロータリーの一行を快く迎えました。

中部名古屋みらいRC会長として参加した会員は、

「この経験があったからこそ、その後、日中間にどんなことが起ころうとも、お互いを理解し、思いやる気持ちに変わりはありません。この交流が誇りとなり、支えとなり、“動じない強い心”になっています」と、語っています。

●奨学期間が終わったあとも、ロータリーとの接点を持つために有効な組織が学友会です。学友会は、元奨学生と現役奨学生によって組織されるもので、日本国内に31、海外には台湾・韓国・中国・タイで、海外で4番目となる米山学友会が設立されました。この時学友会の立ち上げに尽力、タイ学友会広報担当役員を務めています、アヌチャー・ポリブーンさんで今年度地区大会に米山ホームカミング制度で来日が決まっております。現在花王Thailandに就職、日本の花王本社と共同で行う数々の情報プロジェクトに関わっています。

●昨年度、ロータリー米山記念奨学会では、事業創設60周年を記念して、よねやま親善大使を募集しました。80人を超える応募者の中から選ばれた、初代よねやま親善大使のお二人です。親善大使は、ロータリーや一般社会に向けて、米山奨学事業のPRをしています。

●この写真は私がカザフスタンの元奨学生を訪ねた時のもの。

●米山のクリスマス、忘年会の時のもの

●アフリカケニアへ訪問した時のもの

日本のロータリアンが受け継いできた世界に誇る国際貢献事業あり、奨学生にとって様々な職業、世代で構成されるロータリークラブとの交流は奨学生が日本文化に接し、将来や奉仕について考える良い機会となります。教育への投資はこれからの国際親善や友好など計り知れない長期的波及効果が有ります。最後にロータリー米山記念奨学事業は皆様のご寄付によって支えられています、日本の文化、日本人の心を世界各国からの留学生に伝え、世界平和と発展に貢献する米山奨学事業継続のためにぜひロータリアンの皆様のお力を、ご支援をお願いいたします。